

391 子宮頸部熟化に対するサイトカイン(IL-1 β 、IL-8)とヒアルロン酸の役割-培養ヒト子宮頸部細胞と膣炎モデルラットを用いた検討-

秋田大学

小川正樹, 平野秀人, 田中俊誠

〔目的〕子宮頸部の細菌感染による熟化促進の機序を、①培養ヒト子宮頸部線維芽細胞における炎症性サイトカイン(I-CK)添加前後のヒアルロン酸(HA)の産生量の測定、②妊娠後期のラット子宮頸部におけるI-CK投与前後のHAの免疫組織学的検討、により解明することを本研究の目的とした。

〔方法〕①ヒト子宮頸部由来線維芽細胞の培養には、日本産科婦人科学会の倫理規定に従って、閉経前の良性疾患症例(35歳、4妊2産)より摘出した子宮頸部を用いた。IL-1 β (1~100pg/ml)およびIL-8(1~100ng/ml)を添加し、18時間培養した後、上清中のHAをHA-キット(中外製薬)を用いて測定した。②1)IL-1 β (10ng)またはIL-8(100ng)を含有させて膣坐剤を調製し、妊娠16日齢より膣腔内へ5日間連日投与した膣炎モデルラットを作製した。2)21日齢に膣炎モデルラットの子宮頸部を採取し、組織中のHAの局在をHAに対する特異抗体(HABR)を用いて免疫組織学的に検討した。

〔成績〕①IL-1 β およびIL-8は培養細胞においてHAの産生を促進した。②膣炎モデルラットにおける頸部組織中のHAの染色性は亢進したが、特にIL-8膣坐剤投与ラットにおいて著明であった。

〔結論〕IL-1 β およびIL-8は、①培養細胞におけるHAの産生を促進し、②ラット頸部のHAの染色性を亢進させた。以上の成績より、細菌感染により子宮頸部で産生されるIL-1 β およびIL-8は、線維芽細胞でのHA産生を促進させることにより子宮頸部を熟化させることが示された。

392 膣内胎児性フィブロネクチンによる早産の予測

大阪府立母子医療センター, 同研究所*

清水郁也, 岩田守弘, 光田信明, 永田光英, 福家信二, 別宮史朗, 早田憲司, 河本明子, 末原則幸, 関口清俊*

〔目的〕胎児性フィブロネクチン(FFN)を膣や子宮頸管より検出し、早産を予測する試みが報告されているが、それらで使用されたFDC-6抗体とは異なるエピトープ“EDA”を認識するHHS01抗体をFFNのマーカーに用い、切迫早産の予後判定における有用性を検討した。〔方法〕予め同意を得た22週以上34週未満の妊婦を対象とし、1)正常妊婦404人の膣粘液をのべ684回採取し、FFNを測定した。2)破水、頸管縮短、子宮口3cm以上、多胎、前置胎盤を除く入院切迫早産妊婦47人について、膣内FFNによる早産の予測性を検討した。3)切迫早産例の膣内FFNと臨床因子との関係を分析し、予測性を比較した。FFNは抗EDA抗体HHS01を用いた酵素抗体法により定量し、50ng/ml以上を陽性とした。〔成績〕1)正常妊婦のFFN陽性率は0.4%(3/684)で、陽性例に早産はなかった。2)切迫早産47例中、FFN陽性は11例、34週未満の早産は15例で、FFN陽性群と陰性群の検査分娩間日数はそれぞれ19.2 \pm 21.7日と60.0 \pm 26.4日(p<0.0001)、34週未満に分娩にいたった率は、81.8%(9/11)と16.7%(6/36)で、34週未満で早産する率は陽性群で有意に高かった(p=0.0001)。3)FFN陽性群には子宮口 \geq 1cm、出血(+), CRP \geq 2.0mg/dlの例が有意に多かった。FFNまたは臨床因子から34週未満の早産を予測した場合のsensitivityとspecificityはそれぞれ、FFNでは60%と94%、子宮口開大では73%と72%、出血では47%と81%、CRPでは40%と100%であった。〔結論〕HHS01を用いた膣内FFNの測定は切迫早産時において早産を予測する上で特異性が高く、単独の検査として有用と考えられた。